

「申し送り」時間が3割減った秘訣【今日から始める「医師の働き方改革」】第7回

公開日：2022/01/25

[インデックスページへ戻る](#)

医師への時間外労働の上限規制の適用が、ついに2024年4月からスタート。2021年夏時点では、まだ新型コロナ対応に追われる医療現場も多く、対応は困難を極めると予想されます。本連載では、2012年にメディカル・ワークライフバランスセンターを開設し、働き方の満足度アップや超過勤務時間削減を成功させた長崎大学病院の事例を中心に、医師個人とチームが主体になって行う働き方改革を、実践しやすいツールと一緒にご紹介します。



第7回 「申し送り」時間が3割減った秘訣

どの医療機関でも行われている患者さんの情報を関係者が共有する「申し送り」。患者情報を共有し、よりよい医療を提供するため必要不可欠な時間ですが、これに多大な時間がかかっているという組織も多いのではないのでしょうか。

医師の働き方改革に取り組む長崎大学病院・高度救命救急センターでは、ある試みによって、申し送りに使う時間を1年間で3割近く削減することに成功しました。責任者の田崎 修氏に取り組みの内容を伺いました。

—申し送りに着目されたのはなぜですか？

働き方改革をスタートしたのは2019年8月でした。課題を発見し、改革できることの検討から始め、日常的な業務で大きく変えられることとして着目したのが、救急医が1日2回行っている申し送りでした。勤務メンバーは全員参加で、1日当たり平均2時間程度を使っていました。重要性が高い時間なのでいきなり短縮することは難しいかと思いましたが、何からならできるのかを考えました。

時刻/曜日	月	火	水	木	金	土	日
8	多職種合同カンファレンス						
9	申し送り、病棟症例診療方針決定、スタッフによる指導						
10							
11							
12							
13	初療、病棟、ドクターカー業務						
14	初療、病棟、ドクターカー業務						
15	初療、病棟業務						
16							
17	申し送り						
18	NSTカンファ						
19							
20							
21							
22							
23							
24	初療、病棟業務(シフト制勤務)						
1	初療、病棟業務(シフト制勤務)						
2							
3							
4							
5							
6							
7							

—取り組みをどう進めたのでしょうか？

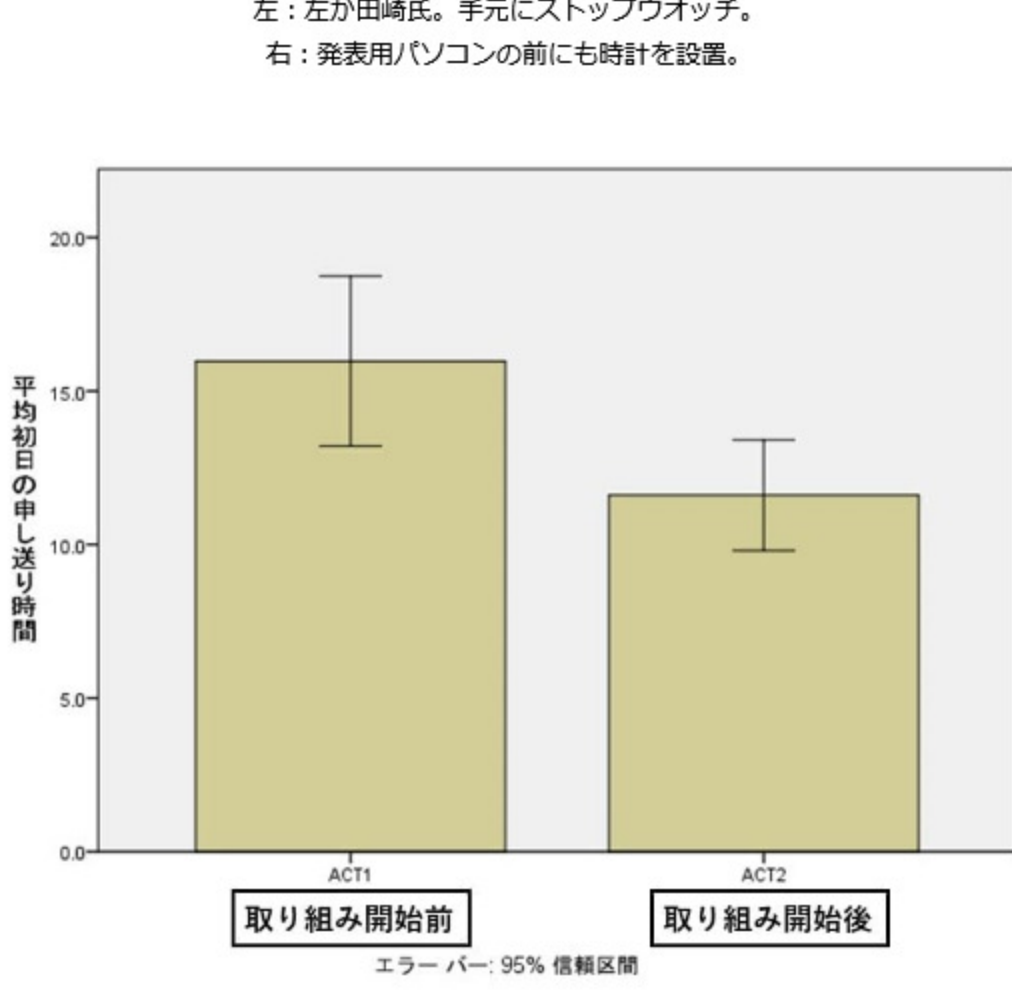
「時間の計測」から始めました。私がストップウォッチを持ち、患者1人당りに使う申し送り時間を計ってみました。発表者の前にも時計を置き、時間の意識を高めました。初回の申し送りは情報が多いため長くなりがちですが、回を重ねるごとに時間の意識が高まり、要点をまとめてコンパクトに行えるようになりました。

申し送りに使う時間の患者1人当たりの平均は、初回16.0分だったのが取り組みをはじめから1年後の2020年8月は11.6分と28%削減し、全患者の申し送り時間も14%削減しました。

取り組み開始から2年ほどたちますが、今でも申し送り時間全体を計測しており、毎日エクセルで記録してグラフを作っています。



左：左が田崎氏。手元にストップウォッチ。
右：発表用パソコンの前にも時計を設置。



1回ごとの時間短縮は小さなものですが、朝の申し送りには送り担当1人、受け担当1人、ホットライン担当1人、研修医2人、看護師長、MSWと私と計8人が参加しています。30分の時間短縮でも8人分なら240分と、大きな差となります。

申し送りの方法もブラッシュアップし、プレゼンテーションと討論の時間を分け、やるべき討論はしっかり進める、というように区分けしました。単に時間を短くする、というよりは質を守りながら生産性を向上させる、という挑戦です。

申し送り人数、時間を計測して平均値を出し続けていると、患者数によって医師の忙しさが変わることが数値的に確認できました。当科で言うと、患者数が10人を超えると皆忙しくなり、余裕がなくなってくる。こちらでコントロールできることは少ないですが、患者数が増えたら早めに転院の可能性を打診するなど、病床管理を積極的にやっています。以前から心掛けていたことではありますが、計測と観察がルーチンになったことで、早め早めに動けるようになりました。

◆時間の意識を高める最初の一步

特定の業務時間を短縮したいとき、まずは今その業務にかけている時間を計測するとよいでしょう。長短といった感覚的なものではなく、数値化することで効果が発揮されます。今回の救命救急センターのように大勢の参加者がいる会議であれば、数分の短縮でもその効果は大きくなります。

会議だけでなく、自分だけで行う書類作成なども時間を計るとよいでしょう。体感と実際の時間が大きく隔たっていることがよくあります。計測・記録を続けていると自然と時間の意識が高まり、ルーチン作業の時間も短縮できます。ただ、この方法で短縮できる時間には限界があるので、その先にチームとして取り組むことも併せて考えるとよいでしょう。

[ページTOPへ](#)

講師紹介



堀江 咲智子 (ほりえ さちこ) 氏
株式会社ワーク・ライフバランス コンサルタント
中小企業診断士

[略歴]

全国の医療機関・製薬メーカーなどでコンサルティングや講演を行っている。コンサルティングでは担当チームのモチベーションを上げながら、楽しく働き方を見直す手法が特長。気合いややる気に頼らず仕組み自体を変えることで本質的な解決ができるようアドバイスするなど、周囲を巻き込みながら全社的に最適な方法を提案している。経営者や役員との対談依頼も多く、経営戦略とワーク・ライフバランスの関係性などを受け入れやすい形でわかりやすく伝える。インプットを増やしてアウトプットの質を高めれば、日本の産業はこれからもっと伸びる！と考え、日々邁進中。

バックナンバー

- ▶ 第7回 「申し送り」時間が3割減った秘訣 **NEW**
- ▶ 第6回 院内連携をスムーズにした「申し送りノート」と「多職種合同カンファ」
- ▶ 第5回 長崎大学の働き方改革、最初の一步は「整理整頓」
- ▶ 第4回 なぜ、働き方改革は「現場主体」でないといけないのか？
- ▶ 第3回 それ、本当に「あなたにしかできない仕事」ですか？

先頭 前 1 2 次 最終

[インデックスページへ戻る](#)

[ページTOPへ](#)

□ 掲載内容はケアネットの見解を述べるものではありません。(すべての写真・図表等の無断転載を禁じます。)

□ 本コンテンツに関する下記情報は掲載当時のものです。

□ [データ、掲載内容、出演/監修者等の所属先や肩書、提供先の企業/団体名やリンクなど]